

第7回豊岡市大交流（観光）ビジョン策定委員会 会議録

開催日時 平成31年3月20日（木）15時30分 ～ 17時30分

開催場所 豊岡市役所本庁舎3階 庁議室

出席委員 平田委員長、国枝委員、前野委員、昆野委員、樋口委員、植村委員

岡野委員、岡田委員、井垣委員、渋谷委員、西村委員、宮崎委員、青山委員

欠席委員 山田委員、倉成委員、田中委員

オブザーバー

豊岡観光イノベーション 藤田事業本部長 たけの観光協会 青山会長、

日高神鍋観光協会 岡藤会長 城崎国際アートセンター 田口館長 他

豊岡市 中貝市長

事務局 小林環境経済部参事、大交流課 谷口課長、吉本課長補佐

資料

1. 豊岡市大交流（観光）ビジョン策定委員会 協議資料
2. 豊岡市大交流（観光）ビジョン策定委員会 交流ビジョン（素案）

■主な議事

1 開会

2 委員長あいさつ

（委員長）：いよいよ完成も近い。最後、悔いのないように各所からご意見を頂戴したい。

3 議事

(1) 豊岡市大交流ビジョン（案）について

事務局より冊子「豊岡市大交流ビジョン（案）」に基づき以下の説明を行った。

- ・これまで資料編に基づいてご議論いただき、その内容をまた資料編に書き加えていくという形で進めてきた。それを「豊岡市大交流ビジョン（案）」として冊子にまとめ、昨日までパブリックコメントを実施した。委員各位からも最終入校日（27日）までに意見を頂き、最終的に仕上げたい。
- ・2ページにこれまでの委員会で議論いただいた内容や思い、ビジョンを策定する目的を文章として整理した。また、16ページには「観光権」的な考え方について文章でまとめた。これらの内容も確認いただきたい。
- ・前回から修正した箇所として、26ページ上段の表中の「入湯税（超過課税）」「法定外目的税」「宿泊税」が、当初は表の色を濃くしていたが、（委員）から新たな税を賦課することが前提のように捉えられるとの指摘を受けてこれをやめ、公平に見ていただけるよう工夫した。
- ・28ページには本委員会の委員名簿を掲載する。最終版には本日撮影させていただいた写真を掲載させていただくことをご了承いただきたい。

(2) 豊岡市大交流ビジョン（案）に係るパブリックコメントの実施結果について事務局より、豊岡市大交流ビジョン（案）に係るパブリックコメントの実施結果についての説明を、「豊岡市大交流ビジョン（案）に対する意見募集（パブリックコメント）の結果と回答について」を基に行った。

- ・意見募集期間は平成31年3月5日から18日までの約2週間、資料は市のホームページ、大交流課・各振興局地域振興課での閲覧。意見の応募者数は36人、延べ件数は94件。
- ・詳細内容について、項目ごとに主な意見とそれに対する市の考え方を読み上げながら説明した。

これを踏まえて各委員より意見を述べた。主なコメントは以下のとおり

(委員)：旅館組合の理事長として、若者世代の需要不足に対する非常に強い危機感を抱いている。その中での追加の税賦課については、しっかりとした検証と、納得感や立ち止まれるような仕組みが必要で、代理徴収者である観光組織の運営を行う人を入れて議論しなければいけない。特別消費税の復活ではないかとの疑念も、業界として強く持っている。

(3) 豊岡市大交流（観光）ビジョン策定委員会の総括について

(委員長)：ビジョン策定に当たり、7回にわたり議論を重ねてきた。委員の皆さんの感想、意見、要望など、お一人ずつ伺っていききたい。

(委員)：市民の方々からは、しっかりとビジョンを読んで、的を射たコメントを頂いていると感じた。それだけ関心が高いということで、委員会の一員として非常にうれしく思う。皆でビジョンをまとめられたことは非常に素晴らしいと思っている。これを良い機会と捉え、われわれ自身が行動することが大切だ。これから豊岡には世界から非常に多様な方が訪れる。大胆な発想と柔軟な考え方で、多面的な視点で自分たちの仕事を見直してみる必要があるのではないか。このビジョンをスタートラインと位置付け、地域の方々のご意見を聞きながら進めていきたい。

(委員)：本委員会では、観光産業は豊岡市にとって非常に重要なものであるという認識を一つにでき、観光の核となるものが、豊岡のローカルへの憧れや共感といったものであるべきだという定義付けもなされた。来年度から、いかに具体的なものに仕上げていくのか、戦略的にどう取り組んでいくのか、どういった推進体制が必要なのかといった観点でさまざまな議論がなされる、いいきっかけになる。

宿泊税は一つの選択肢であり、まだ決定ではないし、前回、(委員)から環境整備税という話もあった。何のために使うかを横にらみしながら広く議論したい。

(委員)：ビジョンの「観光を交流と捉え直した」という最初の一文が、結構革新的というか、私の気持ちともすんなりとマッチする気がする。市民が豊岡での生活を生き生きと楽しんでいることが一番大事であり、豊岡市は観光で動いているという認識について、委員の間では統一がとれたのではないかと感じているが、一般の方々にももう少し周知されればよいのではないかと。今後は、具体的なことで汗をかいていきたいと思

う。

(委員)：豊岡の観光業は、なかなかいいところまでいっているのだが、まだ突き抜けられてはいないと肌身で感じている。方向性はいいと思うので、実際に何をするのか、PDCAをどう回していくのかという具体的な議論をして、次のステージに行ければと思っている。引き続き一緒に伸ばしていきたい。

(委員)：私も「観光を交流として捉える」というところがずっと入ってきた。「観光」と言われると業者のことだけを考えていると思われがちだが、それを「交流」と捉えることで、皆が自分事として考えていけるようになればいい。

今回参加させていただいて、頭の整理ができたことは大きな収穫であり、竹野地域の今後について具体的に考えるきっかけになった。トレンドを意識しつつ、お客さまが求めていることを発信し続けていくことが大事だと思う。

(委員)：この会議に参加して、あらためて観光と農業が非常に大事な役割を果たしていると感じた。今後、違った見方でより一層日本の農業を支えていけるような取り組みをしていきたい。

(委員長)：せっくなので、オブザーバーからも一言頂戴できればと思う。

(オブザーバー)：今回のパブリックコメントや皆さんの議論を聞いて、かなり責任を重く感じている。皆で話し合い、選択したターゲットや成果、その効果と評価に対する説明責任を感じている。さらに皆さんの意見をまとめ、根本的に何が必要なのかも考えながらやっていきたい。

(オブザーバー)：後継者問題の一方で、今、竹野には地域おこし協力隊などの若者がかなり来てくれている。その中で、観光協会内に青年部的な組織をつくって、後継者問題を考えていってはどうか、アンケートも取りたいという話が、若い人たちから出てきている。ビジョンをスタート地点として、若い人たちがつながりを持って地域を活性化していく方向性ができればと考えている。

(オブザーバー)：後継者問題に加え、今年は本当に雪が降らず、民宿をやめる方がかなり出てくるのではないかと心配している。オールシーズンでいろいろなことをやって、観光に関係ない人も取り込んで、地域全体で盛り上げていかなければならないと感じている。皆さんの意見を励みに頑張っていきたい。

(オブザーバー)：観光は交流だと定義していただいたことで、一市民であり、交流好きの人間も観光に携わることができるのだと感じられ、いいまちに帰ってきたなと思っている。ここが本当にスタートで、さらにこれを次につなげていく動きが来年度から始まる。個人的にも、アートセンターとしても、できることにどんどんアグレッシブにトライしていければと思う。

(委員)：私も「観光を交流と捉え直す」と、すごく分かりやすいと思った。市民皆に、観光をして交流しないとこのまちが持続していくことは難しいと認識してもらえるようになればと思う。そして、このいいまちを子どもたちに残し、持続していくようなまちづくりを頑張れたらと思う。

私自身は、自分では考えつかないようないろいろな意見を聞くことができ、このまちに暮らしていくことに希望を持つことができたことが一番大きかったと感じている。そして、前回、(委員)が言われた「1市5町が一つになれる例えの言葉」をずっ

と考えている。それで豊岡が一つになれば最高だ。

(委員):パブリックコメントを拝見して、皆さんがこの土地の資源の豊かさに誇りを持ち、まちのことを真剣に考えていらっしゃるのだなと、つくづく感じた。来年度から、いよいよアクションプランを策定し、実際に実行されていくことになる。そのスタートの現場に関わったことは本当に光栄で、外部の人間ではあるが、今後とも豊岡市への誘客等に関わらせていただければと思っている。

(委員):かばん業界にも非常に参考になる資料や意見等も非常にたくさん出て、意義ある会議に参加させていただいたと感じている。ただ、2019年度にアクションプラン策定、2020年度から事業展開となっているが、もっとスピード感が必要なのではないかとこの点が気になる。人口減少も待つてはくれない。環境がもっと悪くなる前にいろいろな手を打つべきではないか。そして、観光を中心に豊岡を売り、かばんや他のものも売っていくことが、やはり豊岡にとって一番の早道ではないかと感じている。他のものを切り捨てても観光に投資するくらいの意気込みで進めていけばいいのではないか。

(委員):本格的に豊岡に関わりだして2年足らずの人間がこういう場で議論をさせていただけることは、本当にありがたいし、素晴らしいことだと思う。この1年間、データに基づいて議論がなされ、豊岡市の考え方を、胸を張って代弁できるようになった。今後、税の議論についてもウォッチして、自分にできることがあれば、していきたいという思いを持っている。

(委員):私は豊岡に来てちょうど2年ぐらいになるが、まだまだ但馬や豊岡のことは分かっていたのだからということも改めて感じた。今回、豊岡の現状を把握できて、やっとスタートラインに立てたところだと思うので、ビジョンが絵に描いた餅にならないよう、新たな施策を考え観光需要を上げていければと思う。ビジョンに掲げられた「市民生活と観光の調和」という観点から、もっと市民目線で考えていければということと、パブリックコメントで財源のあり方に関して、透明性を持ってというコメントが多くあったので、そこは慎重に考えていかなければいけないと感じた。ここで出た分析結果や市民の声、それぞれのエリアの状況を参考に、今後のアクションプランを考えていければと思う。

(委員):毎年、この時期は採用活動を行っているが、働き手の確保が相当難しくなってきたのだなということを感じている。人材を獲得する施策も早く講じていかないと、どんどん手遅れになると感じている。

(委員長):最後に総括させていただくと、あとちょうど2年で大学が開学する。AO入試や推薦を除き、一般入試だけで受験生が最大で1,000人訪れると試算されている。全員が宿泊するわけではないが、前後2泊する可能性もある。カニのシーズンと重なるので、宿泊が確保できるのかどうかこれから問題になってくる。また、オープンキャンパス、小さいながらも年に2本ぐらいの学会の誘致、演劇やダンスの発表会、卒業式、入学式と、節目ごとに保護者が来ることで、恐らく1万泊弱の宿泊が確保できるのではないかと、1%ぐらいの押し上げになるのではないかと考えている。また、演劇祭も徐々に広がっていくと、5,000泊~1万泊ぐらい寄与するのではないかと考えている。さらに、私は来月から岩波書店の『世界』という雑誌に、「但馬日記」という連

載を始める。これは3年後にはまとめて岩波新書になる予定で、これが大体0.03%ぐらい寄与するのではないかと考えている。

そういう新しい要素も加わってくるので、それを複合的に見ていくことが大事だと思う。城崎という名前で売っていくのか、城崎と神鍋と別々の名前で売っていくのか、豊岡という名前で売っていくのか、あるいは但馬という名前で売っていくのかも、まだまだ議論が必要かとは思いますが、瀬戸内はたった10年で世界ブランドになった。ここ豊岡も、それは可能だと思っている。特に宿泊数を増やすためには、これからは「地域の人とのふれあい」と「食」が必須だと思う。

数値からいっても、観光は既に豊岡市の基幹産業であり、今後唯一伸びしろのある産業であることは明白である。1市5町、オール豊岡でやっていくことのメリットを伝え、豊岡市民全員が、観光こそが豊岡を支えているのだという意識を持ち、携わっている方々にプライドを持って仕事をしていただかなければいけない。それが経済波及効果にもつながる。そのことを可視化する方策と、そのための具体的なアクションを、来年度は考えていく必要がある。

(市長): 豊岡にとっては、観光による宿泊とかばんが二大基幹産業であることはデータ上明らかだが、まだその可能性を十分に具体化できていない。もっと突き抜けた産業になり得るはずだ。専門職大学ができて、卒業生が働きたいと思わないような環境では、人手不足はいつまでたっても解決しない。豊岡の観光産業自体を相当レベルアップさせていき、そこで働くこと自体が誇りになるような産業に育て上げていかなければいけない。そこから観光ビジョンをつくろうと考えた。

「観光」が観光業者だけの問題ではなく、豊岡市民がさまざまに関わり得る、その中で楽しむことができるという膨らみを持たせる「大交流」という表現に落ち着いたことは、大変よかったと思っている。豊岡の観光は、突き抜けたものになる可能性を十分持っていると思う。皆の力を合わせて突き抜けていきたい。圧倒的に美しいまち、圧倒的に楽しいまちを、私たちは提供していく必要がある。それがまた、自分たちの誇りにもつながると思うので、そういう動きを市として進めていければと思っている。

宮台真司さんが、「エンターテインメントとは、リフレッシュだ。しかし、アートは違う。アートは人の心の中に違和感や異質感を持たせるもので、それが何かの気付きのきっかけになったりするものだ」と言っていた。幸いにして、豊岡では演劇祭の準備がスタートし、(委員長)や、(委員長)の劇団の本拠が豊岡に移ってくる。アートによる観光が、豊岡では可能なのではないか。それが、わずか8万人の人口の、廃れつつある地方の中で実現すれば、それ自体が違和感をもたらして、いろいろな気付きを与えることができるのではないか。

もう一つ、私はジオパークにも可能性を見いだしている。私たちの日常の生活環境とは全く違う、一千万年前の地球の活動による風景が今目の前にある。そこをうまく磨いて演出していくと、可能性が出てくるのではないか。そういうことも含めて、ぜひ突き抜けた観光、大交流というものを、この場で実現していきたいと思っている。

合併のとき、「真珠のネックレスを作る」という議論をしていた。それぞれの町は一つの真珠の玉で、それだけでも素敵だが、それをつないでネックレスにした方がもっと素敵になる。なかなか具体化しないが、大交流にはその可能性がある。人口は減り

続けているが、実は竹野の社会減は止まり始めている。大交流ビジョンを進める中で各地の人口減少が下げ止まりの方向に動いていけば、それがさらに励みになって、エネルギーにつながっていくのではないかなと思っている。

また、城崎温泉には入湯税が年間約 9,700 万円入ってくるが、湯島財産区に 3,000 万円毎年入れており、温泉の下水と水道料金約 3,200 万円を一般財源、つまり入湯税で補填している。さらに、観光客がたくさん来るので火事が起きたら大変だということで、3,000 人余りの人口の城崎の消防署には消防士が 17 人いる。城崎よりも人口の多い竹野と但東には 10 人で、人件費が 6,000 万円ぐらい違う。つまり、城崎は入湯税をはるかに超えて赤字になっている。それでもやはり、私たちはその上にプラスαして、観光の施策に資源を突っ込んできたし、これからもそうしたいと思っている。さまざまな可能性について論点を整理した上で、最後は皆が納得できるよう議論を進めていくことを、新年度の宿題にさせていただきたい。

議会の総括説明で、私はジェンダーギャップの解消を徹底して進めること、行財政改革をすること、演劇のまちを目指すことという三つの所信を打ち出した。演劇に関しては、アートセンターができて演劇の拠点ができたし、2 年後に専門職大学ができる。国際演劇祭も始める。これから、豊岡のまちでレベルの高い演劇を楽しむことが可能になるだけでなく、演劇を学んだ子供たちが育っていく。小学校 6 年生と中学校 1 年生には全員、演劇の授業を受けてもらっている。自分たちで演劇をつくって演じることを通じて、表現力を身に付ける、あるいはコミュニケーション能力につなげていこうという作戦だ。さらに今秋からは、非認知能力の向上を狙って、(委員長) にプログラムを作ってもらって、小学校低学年に演劇のワークショップをやってもらおう。非認知能力とは、やり抜く力、自分を抑制する力、あるいは意欲であり要は生きる力である。この非認知能力を身に付けるにはアートがいいといわれている。

もう一つ、4 月から SPARK 協会という発達障害児の発達支援をやる組織を誘致した。その指導者は、演劇やダンスの素養がある方がいいといわれている。ここでもアートなのである。

単に素敵なプログラムがあり、皆で演劇を見て楽しむだけでなく、非認知能力の向上や発達障害児の発達支援にまで演劇が役割を果たし得る。そういうある種の深さを持った演劇のまちが、ここ豊岡でできるのではないかな。それは市民にとっては非常にハッピーなことだし、それが大交流の大きな推進力になるのではないかなと思っている。(委員長): 豊岡は教育から変えようとしている。上っ面だけではなく、下からも上からも、両方から変えようとしている。そここのところをきちんと積み重ね、有能な観光人材、おもてなしの人材を育てて、最終的に大学を出口にして輩出していく。それが、遠くを感じるけれども着実な道だと思っている。ふるさと教育、英語教育、コミュニケーション教育の三本柱で、観光事業に従事する人材を育てていきたい。ぜひご協力いただければと思う。

4 その他

事務局：本日の策定委員会の意見やパブリックコメントを踏まえ、事務局で冊子化の作業をさせていただき、3 月末に「豊岡市大交流ビジョン」として完成したいと考えてい

る。それを受けて、最終4月1日に定例の市長記者会見の場で、市長からビジョン策定について発表していただくという流れにしたいと考えている。

5 閉会

事務局：次年度、31年度以降については、観光財源のあり方、アクションプラン、それらを進めるための今後の組織体制について検討していくことを予定している。委員の皆さまにはいろいろな立場からまたご協力いただきたい。